

編集後記：10月上旬の1週間、オーストラリアのメルボルンで開催されていたWMOデータ同化シンポジウムに参加しました。オーストラリアは南半球に位置するため日本とは季節が逆になりますが、時差はほとんどありません。日本からの距離でいえば北米や西欧とほぼ同じ、むしろオーストラリアの方が若干近いくらいで、とても身近な国です。一方、オーストラリアはヨーロッパ系の住民が多く、英語が公用語であるため、日本人の目から見ると欧米諸国の一員のような感覚ではないでしょうか。

しかし実際の欧米諸国から見ると、実はオーストラリアは極東の日本よりも遠く離れた「隔絶された大陸」です。例えば、東京-メルボルン間の距離は約8,000 kmなのに対し、ニューヨーク-メルボルン間およびロンドン-メルボルン間は約17,000 kmです。欧米諸都市からオーストラリアへ向かおうとすると、通常は旅客機の航続距離の限界を超えていますから、アジアなどでの乗り換えが必須になります。日本からアルゼンチンなどの南米へ出掛けるのと似て、現代においても大旅行なのです。

ところで、欧米で開催される国際学会／シンポジウム／ワークショップには残念ながら日本人の出席者が少ないように普段から感じてきました。日本の人口や経済力に比べて、参加者に占める日本人の割合が少ないのです（通常は全体の数%程度）。その理由は一部には欧米諸国が日本から遠いという地理上のハンディもあるでしょう。しかしオーストラリアで開催される今回の国際シンポジウムでは逆に日本に地の利があり

ました。ですから、その参加者は日本人だけになるのではないかと期待(?)していたのです。

ところが実際は、やはり今回も日本人が占める割合は日本の国力を鑑みるとあまりに少なく（全体の約7%）、参加者の大部分は遠路遙々やって来た欧米人でした。なぜこのようなことが起こるのでしょうか。もちろん、渡航費・滞在費・会議登録費は安い値段ではありませんし、全ての人が簡単に海外出張が認められる立場にいるわけではありません。しかしそのような条件は欧米人も同じだと思います。

データ同化は統計学、観測、モデルシミュレーションなど様々な研究分野にまたがる境界領域、未来の科学を開拓するフロンティア領域です。科学技術立国を標榜し、世界で最も豊かな国の一つとして人類の文化発展（広い意味で科学は文化あるいは芸術に含まれると思います）に貢献すべき日本が決して蔑ろにはいけない最先端研究の一つであると断言できます。そのようなフィールドならば尚のこと、日本は世界にプレゼンスを示すべきではないでしょうか。

そのように考えてみると、現状の日本の存在感の薄さに対して寂しい気持ちになりました。今回の国際シンポジウムに限りません。またデータ同化の分野にも限定しません。もっと我々のプレゼンスを世界に示すことができるように、日本人研究者・技術者・学生一人一人のメンタリティを高めていこうではありませんか。少し強引になりますが、「天気」もその一助となるように頑張らねば、と思う次第です。

(関山 剛)